



ゲノムの先端研究を通じ、未知の領域に挑む親泊教授。徳島大疾患ゲノム研究センター（吉本旭撮影）

夢を追う

5

1997年秋、熊本大学医学部の研究室。「大発見だ。これで学問が変わる」

遺伝子の研究が現代医療を進化させると信じ、研究者へと歩を進めた男は、糖尿病と遺伝子との関連性を示す実験結果が現像されたフィルムを手に、一人興奮していた。

男性の名は親泊政一さん(42)。当時は大学院に入ってから1年目。その後も研究を積み重ね、2008年春、徳島大学疾患ゲノム研究センター(徳島市蔵本町3)の教授に着任した。親泊さんは糖尿病が専

ゲノム

門。1995年に大学を卒業した後、大病院で患者と触れあう中で、現代医療の限界を感じた。

「国内で予備軍も含めて年間70万人も増えている。徳島県の人口に近い数字。同じように不養生をしても、なりやすい人とうでない人がいて、原因ははっきり分からない。治療薬もきり分からない。治療薬も血糖値をコントロールする

薬ばかりで、治す薬はな

びていたのが「ゲノム」だ。不足に陥ると、血糖値を下と振り返る。ゲノムとは生物が持つ遺伝情報のこと。このインスリンを作る必要のつちタンパク質の作成にかかわる部分が遺伝子。遺伝子がいつ、どれだけタンパク質(細胞やホルモン、消化酵素など)を作るかはゲノムに書き込まれたプログラムでコントロールされている。

「単に場所を変えている尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だった。インスリンをつくる臓器のβ細胞の働きが悪くなる時に、小胞体ストレスが起ることを遺伝子の解析から見つけた。「直感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」

「単に場所を変えている尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だった。インスリンをつくる臓器のβ細胞の働きが悪くなる時に、小胞体ストレスが起ることを遺伝子の解析から見つけた。「直感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」

「単に場所を変えている尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だった。インスリンをつくる臓器のβ細胞の働きが悪くなる時に、小胞体ストレスが起ることを遺伝子の解析から見つけた。「直感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」

「単に場所を変えている尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だった。インスリンをつくる臓器のβ細胞の働きが悪くなる時に、小胞体ストレスが起ることを遺伝子の解析から見つけた。「直感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」

「単に場所を変えている尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だった。インスリンをつくる臓器のβ細胞の働きが悪くなる時に、小胞体ストレスが起ることを遺伝子の解析から見つけた。「直感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」

糖尿病研究積み重ね

徳島大学疾患ゲノム研究センター 08年4月設立。前身のゲノム機能研究センターを含めると14年の歴史がある。未解決の病気の克服などを主な目的とし、今は教授6人がさまざまな角度から研究に取り組んでいる。

(編集委員・門田誠) 〓おわり